

日本語の直示移動動詞の選択原理について
——「行く／来る」の選択はどのようにして決まるのか？——

澤 田 淳
(青山学院大学文学部 准教授)

松 山 大 学
言語文化研究 第38巻第1 - 2号 (抜刷)
2018年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 38 No. 1-2 September 2018

日本語の直示移動動詞の選択原理について

——「行く／来る」の選択はどのようにして決まるのか？——

澤 田 淳*

1. はじめに

話し手のいる位置への求心的な移動や、話し手のいる位置からの遠心的な移動に典型的に見られるような、言語行為参与者（ないしは、発話行為参与者）（speech act participants）（話し手または聞き手）（の位置）と関係づけられた「直示的移動」（deictic motion）を、どのような言語表現を用いて表現するかは言語によって異なる（DeLancey (1981, 1985), Wilkins and Hill (1995), Uehara (2006), Devos and van der Wal (2014), Huang (2014) 等）。Huang (2014: 204) は、直示的移動を表す際に使用される言語表現を「直示的方向表現」（deictic directionals）と呼び、直示的方向表現を(i)移動の接辞、形態素、不変化詞と(ii)移動動詞の2種に分けている。Huang (2014: 204) によれば、世界の言語には、日本語の「行く／来る」や英語の come/go のような「直示移動動詞」（deictic motion verbs）を持たない言語も少なくなく、それらの言語では、代わりに、通例、‘hither/thither’を意味する移動の接辞・形態素・不変化詞を利用して直示的移動が表現されるという。

このように、直示的移動の表現の仕方にはヴァリエーションが認められるが、通例、どのタイプの直示的移動の表現においても、話し手の「視点」（viewpoint）、ないしは、「直示的中心点」（deictic center）が含まれていると言

* 青山学院大学文学部 准教授

える。一般に、COME は視点（直示的中心点）が到達点に、GO は視点（直示的中心点）が到達点以外（典型的には出発点）に置かれていると整理できる（DeLancey (1981: 636), 澤田 (2015: 64) 参照)¹⁾

たとえば、次の英語の come/go の例を見てみよう。

- (1) He was {going/??coming} up the steps. There was a wad of bubble-gum on the seat on his pants. (Fillmore 1982: 263)

ここでは、go と異なり come は不自然となるが、これは、移動主体の後ろ姿を捉える後続文の情景描写は、話し手の視点から遠ざかって行く go の情景描写とは自然に調和するが、話し手の視点に近づいて来る come の情景描写とは通例調和しないからである（Fillmore 1982: 262-263）。次のような例であれば come は自然となる（go も自然となるが、go の場合、話し手は主語の移動を正面からではなく横から眺めていることになる）（Fillmore 1982: 262-263）。

- (2) He was {going/coming} up the steps. There was a broad smile on his face. (Fillmore 1982: 262-263)

このような視点特徴は、基本的に日本語の「行く／来る」にも当てはまる。たとえば、次の例から、視点が到達点に置かれている場合は「来る」が、視点が到達点以外（出発点）に置かれている場合は「行く」が選択されることがわかる。

1) 本稿では、英語の大文字表記 COME, GO を、それぞれ、「求心的移動」、「非求心的移動（遠心的移動を含む）」を表す移動表現の汎言語的な総称として用いている。「求心的」、「非求心的」という用語については、三上 (1970: 149-150) を参照。

なお、ダイクシス（直示性）を含む移動表現一般の類型論については、松本（編）(2017) を参照。

- (3) a. 一艘の小舟がこちら岸へと向かって {*行った/来た}。
 b. 一艘の小舟が向こう岸へと向かって {行った/*来た}。

しかし、このような「視点」に基づく整理によって、実際の COME/GO の選択（適格性）の全てが直ちに予測できるというわけではない。たとえば、次の「行く/来る」の例を見てみよう。

- (4) (話し手が、主張先から、一人暮らしをする父親に電話をかける)
 俺、今、出張中で、来週までうちには帰れないんだけど、今日、子供達が帰省するみたいなんだ。せっかくだから、親父も今日うちに {?? 行かない/来ない} か？ 子供達も久しぶりに顔見たいって言ってるようだし。
- (5) (話し手が、主張先から、一人暮らしをする父親に電話をかける。花子は話し手の妻を指す)
 昨日から花子に何度も電話をかけてるんだけど、全然出ないんだ。それで、俺のほうは今出張中で、すぐにはうちに戻れそうにないんだ。親父、悪いけど、少し花子の様子を見に、うちに {行って/??来て} くれるか？

同じく話し手の自宅への移動を表すのに、なぜ、(4)と異なり、(5)では、到達点に視点を置いた「来る」が使いにくいのであろうか。

本稿の目的は、現代日本語（共通語）の「行く/来る」の選択原理を明らかにすることである。

本稿の構成は次の通りである。2節では、「指向性」(orientation)と「終結性」(telicity)の観点から、「行く/来る」の意味論を考察する。3節では、「行く/来る」の視点制約について考察する。4節では、「行く/来る」の語用論的な選択原理を、(i)話し手が移動主体である場合、(ii)他者が移動主体である場

合、(iii)話し手と他者が共に移動主体である場合の3つに分けて考察する。5節はまとめである。

2. 「行く／来る」の意味論

2.1. 指向性

Fillmore (1972: 4, 1997: 80) は、英語の go, come を、それぞれ、「出発点指向動詞」(source-oriented verb)、「到達点指向動詞」(goal-oriented verb)と特徴づけている(ただし、go には「中立的」(neutral)な用法もあるとされる)。

次の例を見てみよう(パーティー会場から自宅への移動を表すものとする)。

(6) a. He went home around midnight.

b. He came home around midnight. (Fillmore 1997: 80)

ここでの midnight は come/go の移動がなされた時点(以下、移動がなされる(なされた)時点を「移動時」²⁾と呼ぶ)を表すが、go は出発点指向動詞であることから、a 文の midnight は、パーティー会場を出た時刻、すなわち、「出発時」を表すのに対して、come は到達点指向動詞であることから、b 文の midnight は、家に着いた時刻、すなわち、「到着時」を表すと解釈される(Fillmore 1997: 80)³⁾

2) 本稿で言う「移動時」は、Fillmore (1997: 18) の言う「参照時」(reference time)に相当する。Fillmore (1997: 18)によれば、英語 come の基本的な使用場面は次のケースである(英語 come のさらなるケースについては、Fillmore (1972, 1975, 1997)を参照)。

- (i) a. 発話時 (=今) に話し手が到達点にいる
- b. 発話時 (=今) に聞き手が到達点にいる
- c. 参照時 (=その時) に話し手が到達点にいる
- d. 参照時 (=その時) に聞き手が到達点にいる

たとえば、次の例の come は、少なくともこの4つの解釈に曖昧となる。

- (ii) John came to the office yesterday morning. (Fillmore 1997: 18)

同様に、次の日本語の例では、「行く」、「来る」は、それぞれ、出発点指向動詞、到達点指向動詞であるため、「行く」の文では学校に向けて出発したのが「ちょうど今」であったことを、「来る」の文では学校に到着したのが「ちょうど今」であったことを示す。

(7) ちょうど今, 太郎が学校に {行った/来た} ところだ。

2.2. 「直示的中心点のある方向への移動」か「直示的中心点に到達する移動」か

Wilkins and Hill(1995: 249)によれば、諸言語の COME は、「直示性」(deixis)に関する語用論レベル以外にも、移動の「終結性」(telicity)などに関する語彙意味論レベルにおいても差異が認められ得るという(さらに、Goddard (1998: 213-218), Levinson (2004: 117-118), Huang (2014: 207) 参照)。Wilkins and Hill (1995: 235, 244-245)によれば、次の図1のように、「直示的中心点のある方向への移動」(*TOWARDS*-the deictic center)であれば、到達点が直示的中心でなくても COME が使える言語(例: Mparntwe Arrernte 語 (Pama-Nyungan, Australian))と、「直示的中心点に到達する移動」(*TO*-the-deictic center)でないと COME が使えない言語(例: Longgu 語 (Oceanic, Austronesian))とが区別できるという³⁾

3) come/go における時点表現の解釈は実際にはもう少し複雑である。次の例を見てみよう。

(i) He went to the dentist's at two o'clock. (Fillmore 1992: 50)

(ii) He left for the dentist's at two o'clock. (Fillmore 1992: 50)

Fillmore (1992: 50)によれば、(i)の例は、(ii)の例と(時点表現 two o'clock の解釈が)同じであるとは限らないという。このことは、go と共起する時点表現は、必ずしも、出発時しか表せないというわけではない(到着時にも解釈され得る)ことを意味する。

一方で、(6a)では、時点表現が出発時しか表せないのも事実である(Fillmore 1992, 1997)。Fillmore (1992: 50)は、ここでは、home という語の存在が midnight の解釈を出発時に限定させている可能性を示唆している。

4) Mparntwe Arrernte 語は、中央オーストラリアのアリスプリングズ(の周辺)で話されている伝統的な言語、Longgu 語は、ソロモン諸島のガダルカナル島で話されている言語である(Wilkins and Hill 1995: 215-216)。

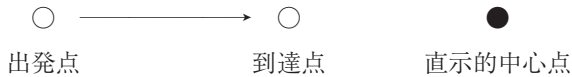


図1 直示的中心点のある方向への移動 (cf. Wilkins and Hill 1995 : 218)

たとえば、次の(8)の Mparntwe Arrernte 語の *petye-* (COME) の例を見てみよう ((8)において、言語行為参加者(話し手, 聞き手)は、移動主体が店に到達する時点(到達時)において店にいないものとする。また、店は言語行為参加者の「ホームベース」(home base) (Fillmore 1997 : 90) (4.2.2.4節)(たとえば、言語行為参加者が経営する店)ではないものとする) (Wilkins and Hill 1995 : 225, Goddard 1998 : 215)。

- (8) Re petye-me store-werne, ikweripperre nhenhe-werne
 3sg 'come'-NPP store-ALLATIVE after which here-ALLATIVE
 petye-tyenhenge
 'come'-subsequently
 'She's "coming" to the store, after which she's coming towards here.'

(Goddard 1998 : 215)

(8)の例は、下の図2(a)の移動状況を表した例である(図2で描かれている人物、建物、●は、それぞれ、移動主体、店、直示的中心点(話し手, 聞き手の

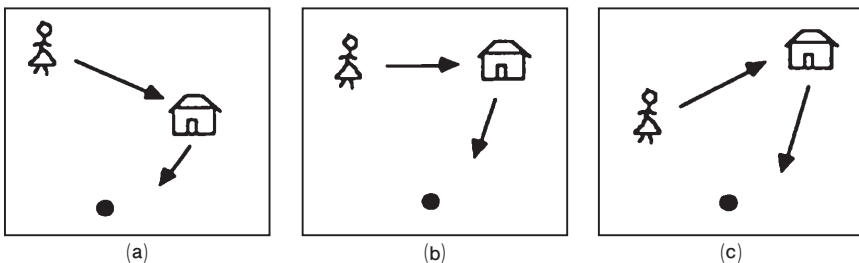


図2 (Goddard 1998 : 216)

いる場所)を表す)。(8)の例では、直示的中心点(発話場所)から離れたところにある店への移動が *petye-* (COME) で表されているが、これは、Mparntwe Arremte 語では「直示的中心点のある方向への移動」(TOWARDS-the deictic center) (図1)であれば、到達点(直示的中心点)でなくても COME が使える言語だからであるとされる。ただし、図2(b), (c)のように、移動主体による店への移動が「直示的中心点のある方向への移動」とはみなしにくい場合には、店への移動に対して *petye-* (COME) は使いにくいとされる (Wilkins and Hill 1995: 224-225, Goddard 1998: 215-216)。

(8)の例に概ね対応する次の(9)の日本語の例では、店への移動主体の移動に対して「来る」が使いにくい((9)の例では、言語行為参加者(話し手、聞き手)は、移動主体が店に到達する時点(到達時)において店にいないものとする。また、店は、言語行為参加者のホームベースではなく、言語行為参加者の視界にもないものとする)。

(9) (図2(a)の状況で)

彼女は店に {行った/??来た} あと、ここに来る。

図2(a)の移動場面に考察を限定させた場合、日本語の「来る」は、Mparntwe Arremte 語の *petye-* よりも、「直示的中心点のある方向への移動」(TOWARDS-the deictic center)での使用が困難である(または、限定されている)ことが示唆される。日本語の「来る」の「終結性」などに関する詳細な意味論的考察は今後の研究に委ねたい⁵⁾

3. 「行く／来る」の視点制約

2.1節において、「行く」、「来る」が、それぞれ、出発点指向動詞、到達点指向動詞である点を確認した。出発点指向動詞、到達点指向動詞には、ほかに

も、それぞれ、「発つ／出発する」、「着く／到着する」などの移動動詞がある。しかし、これらの移動動詞は直示移動動詞とはみなせない。視点制約を持たないからである。

たとえば、話し手が移動主体である場合、通例、「来る」の使用は発話場所が到達点の場合に、「行く」の使用は発話場所が到達点以外の場合に限られるが(4.1節)、「着く」などの移動動詞は発話場所がどこでも使え、話し手の位置(視点)による制約はない。

(10) a. (山頂にある山小屋での発話。「ここ」=山小屋)

我々がここに {来る／*行く／着く} までに5時間ほどかかった。

b. (山頂にある山小屋を見上げながら。「あそこ」=山小屋)

我々があそこに {*来る／行く／着く} まであと5時間ほどかかる。

では、「行く／来る」は、どのような視点制約を持つ動詞として記述されるであろうか。

久野(1978)は、「行く／来る」に対して次の視点制約を与えている(Eはempathy(共感度)の略号。 $E(x) > E(y)$ では、話し手の視点がyよりもx寄

5) 日本語では、「マデ」格が全体の行程の中の臨時の停止点をマークし得るため、次の(i)の例のように、移動主体が最終的な終着点(目的地)に至らなくても、「来る」と言える場合がある(坂原(1995: 114)参照)。ただし、その場合、直示的中心点は、移動の「潜在的な終着点」(potential endpoint)(Wilkins and Hill 1995: 249)として認識されている。

(i) (話し手は東京で山田の到着を待っていた場合)

山田君は新幹線に乗って博多から静岡まで来た。

(i)の「マデ」格を、次の(ii)のように、「へ／ニ」格に変えた場合、「来る」は使いにくくなる(ii)の例において、静岡は話し手のホームベースでないものとする)。「へ／ニ」格で示された地点が終着点となり、話し手のいる直示的中心点の東京は潜在的な終着点とは解釈できなくなるからである。

(ii) (話し手は東京で山田の到着を待っていた場合)

??山田君は新幹線に乗って博多から静岡 {へ／に} 来た。

この点は、日本語の「来る」は、直示的中心点が移動の潜在的な終着点でなくても使われるMparntwe Arremte語のpetye-(COME)(Wilkins and Hill 1995: 249)とは性質を異にする可能性を示唆する。

りに置かれていることを示す)。

(11) 「来ル・行ク」の視点制約：

a. 話し手が動く主体である場合

発話場所が到達点であれば「来ル」、出発点であれば「行ク」が用いられる。

b. 話し手が動く主体でない場合

「来ル」 発話の時点、或いは動きの動作の起きる（起きた）時点に到達点にいる（いた）（動きの主体以外の）人に話し手の視点が接近している時用いられる。

E （到着点側の人） $> E$ （動きの主体，出発点側の人）

「行ク」 その他の場合に用いられる。

E （動きの主体，出発点側の人） $\geq E$ （到着点側の人）

（久野 1978：253-254）

次の a 文と異なり，b 文は自然であるが，これは，「来る」と異なり，「行く」は「中立の視点」を持つためであるとされる（久野 1978：264）。

(12) a. *太郎が花子の家を訪ねて来た日は，丁度花子が太郎の家に来た日であった。

b. 太郎が花子の家を訪ねて行った日は，丁度花子が太郎の家に行った日であった。
（久野 1978：264-265）

では，次の例を考えてみよう（「弟さん」は「山田さんの弟」を指すものとする）。

(13) 山田さんが弟さんに会いに来たよ。

ここでは、「弟(さん)」と「来る」の2つの視点表現が現れている。久野(1978)によれば、「弟(さん)」のような「対称詞」には次の視点制約が課される。

(14) 対称詞の視点ハイアラーキー：

対称詞 x (例えば John) と、 x に依存する対称詞 $f(x)$ (例えば John's wife) がある場合、話し手の x と $f(x)$ に対する共感度に、次の関係が成り立つ。

$$E(x) > E(f(x)) \quad (\text{久野 1978: 135})$$

ここから、(13)の「弟さん」は、「 $E(\text{山田さん}) > E(\text{山田さんの弟さん})$ 」の視点関係を表すことになる。さらに、(13)の「来る」が「 $E(\text{山田さんの弟さん}) > E(\text{山田さん})$ 」の視点関係を表すと仮定する。すると、次のように、「来る」の視点制約と対称詞の視点ハイアラーキーとに視点関係の矛盾が生じ、この文が不適格な文であると予測されることになる(この点については、澤田治美(2009: 112-113)も参照)。

(15) (13)の例の視点関係(解釈1)

「来る」の視点制約： $E(\text{山田さんの弟さん}) > E(\text{山田さん})$

対称詞の視点ハイアラーキー： $E(\text{山田さん}) > E(\text{山田さんの弟さん})$

文全体： $*E(\text{山田さんの弟さん}) > E(\text{山田さん}) > E(\text{山田さんの弟さん})$ (*の表示は、文全体の視点関係に論理的矛盾があることを示す)

しかし、(13)の文は状況によっては全く自然な文である(澤田(2011: 170)参照)。すなわち、発話時または到達時において、到達点(=山田さんの弟さんがいる(いた)場所)に話し手もいる(いた)場合、この文は完全に自然である。この状況において(13)の文が適格となることを正しく予測するためには、(15)

とは異なる視点関係に設定し直す必要がある。そこで、この状況の場合、到達点は（発話時／到着時において）話し手がいる（いた）場所であるという点に注目し、「来る」の視点関係を「E（話し手）> E（山田さん）」と設定してみよう。次のように、この「来る」の視点関係は対称詞の視点関係と矛盾せず、(13)の文が適格となり得ることを正しく予測する。

(16) (13)の例の視点関係（解釈2）

「来る」の視点制約：E（話し手）> E（山田さん）

対称詞の視点ハイアラキー：E（山田さん）> E（山田さんの弟さん）

文全体：E（話し手）> E（山田さん）> E（山田さんの弟さん）

一方で、(13)の文が不自然となる状況があるのも事実である。その状況とは、発話時にも到達時にも、到達点（＝山田さんの弟さんがいる（いた）場所）に話し手がない（いなかった）という状況である。この状況では、「来る」よりも「行く」を使うのが自然である。(15)が示す視点関係は、この状況において(13)の文が不自然となることを正しく予測していたことになる⁹⁾

久野（1978）では、「話し手が動く主体でない場合」の「来る」に対して「E（到着点側の人）> E（動きの主体，出発点側の人）」という視点制約が設定されているが、どのような状況の時に誰を「到着点側の人」に入れるべきかの指針は示されていない。久野（1978）の（11b）の視点制約は、「話し手が動く主体でない場合」の「行く／来る」の視点の相違を明示的に示したものではあるが、これによって、「話し手が動く主体でない場合」の「行く／来る」の選択（適格性）の全てが自動的に予測できるというわけではない。本稿では、「話し手が動く主体でない場合」においては、（発話時または移動時に）話し手が物理的に到達点にいる（いた）ケースと、そうでないケースとを区別することが、「行く／来る」の選択（適格性）の予測において重要となることを論じる（詳しくは、4.2節を参照）。

4. 「行く／来る」の語用論的な選択原理

本節では、(i)話し手が移動主体である場合、(ii)話し手以外の他者が移動主体である場合、(iii)話し手と話し手以外の他者が共に移動主体である場合の3つのケースに分けて、「行く／来る」の語用論的な選択原理を明らかにする。

4.1. 話し手が移動主体である場合

話し手が移動主体となるケースに関して、久野(1978)では、「発話場所が到達点であれば「来る」、出発点であれば「行く」が用いられる」(=11a)と一般化されている。概ね妥当な一般化であると言えるが、「行く」の場合、発話場所が「到達点以外」であればよく、必ずしも発話場所が「出発点」である必要はない。たとえば、次の例の発話場所は、出発点の「太郎の家」である必

6) 他者が移動主体となるケースでは、話し手が発話時、到達時のどちらの時点においても到達点にいない(いなかった)という場合でも「来る」が使える場合がある(4.2.2節参照)。しかし、(3)の例の「来る」は、話し手が発話時にも到達時にも到達点にいない(いなかった)場合には使用しにくい。次の例も同様である。

(i) (話し手が発話時にも到達時にも山田さんの弟のもとにいない場合)

?山田さんが弟さんに会いに来るのではと心配だ。(弟さん=山田さんの弟さん)

4.2.2.1節で論じるように、「行く／来る」の語用論的な選択原理の1つに、「移動主体よりも到達点側の人のほうが話し手にとって心理的に近い人である場合は「来る」が、逆に、到達点側の人よりも移動主体のほうが話し手にとって心理的に近い人である場合は「行く」が選択されやすい」という「親近感」(または「共感」)に関する原則がある。

(i)の例では、「(山田さんの)弟さん」は「山田さん」を「参照点」(reference point) (Langacker 1991)とする表現であるが、この場合、認知的な際立ちに加え、話し手の親近感(共感)も、「(山田さんの)弟さん」よりも「山田さん」に置かれやすいと言える(参照点構造と「共感」(empathy)との関わりについては、久野(1978: 135), Langacker (1991: 171)を参照)。(i)の例では、移動主体である「山田さん」のほうが(参照点である点で)到達点側の人である「(山田さんの)弟さん」よりも話し手にとって心理的に近い人であるために、「来る」が選択しにくいのだと言える。

一方、次の(ii)の例では「来る」は自然である。

(ii) (話し手が発話時にも到達時にも山田さんのもとにいない場合)

山田さんの弟さんが山田さんに会いに来るのではと心配だ。

ここでは、移動主体である「山田さんの弟さん」よりも到達点側の人である「山田さん」のほうが(参照点である点で)話し手にとって心理的に近い人であるために、先の「親近感」に関する原則により、「来る」が選択しやすくなっている(自然となっている)。

要はなく、到達点の学校でなければどこでもよい。

(17) 僕は明日も太郎の家から学校に行くよ。

そこで、久野（1978）の（11a）に若干の修正を施した次の原則を提示する。

(18) 話し手が移動主体である場合：

通例，発話場所が，到達点であれば「来る」，到達点以外であれば「行く」が選択される。

この原則を踏まえた上で，次の例を見てみよう。

(19) （状況：話し手と聞き手は，今，大学近くの喫茶店にいる）

僕は明日も大学に {行く／来る} つもりだ。

発話場所は到達点の大学ではないが，ここでは「来る」も許容される。これは，発話場所の喫茶店は，到達点である大学の「圏内」にあるためである（それゆえ，発話場所の喫茶店が大学から遠ざかった場所にある場合は「来る」は使いにくい）。「到達点」を「到達点の圏内」に緩めれば，この例の「来る」も(18)の原則の範囲内で説明可能である⁷⁾

一方で，実際の談話では，(18)の原則から逸脱した「行く／来る」の運用（選択）も見られる（この点に関しては，片岡（2008）も参照）。たとえば，次の実例では，発話場所が到達点でありながら，「行く」が使われている（ただし，番組の字幕では「来られる」に修正されていた）。

(20) （状況：記者が，ヘッドホンで音楽を聞く新型のクラブを取材に訪れ，女性客にインタビューする場面）

記者：クラブとかは行くんですか？

女性客：いや、全然。逆にここだったら気軽に行けるかなって。

(ワールドサテライト, 2015年4月16日放映)

また、過去の体験を回顧するような発話スタイルの下では、発話場所の視点から離れ、過去の体験時に視点を没入させることもある程度許される。到達点での過去の体験を回顧する次の例では、発話場所は到達点の東京ではないが、「来る」の使用はそれほど不自然ではない。

(2) (状況：話し手は発話時において、到達点の東京にはいない)

私が東京に {行って／(?)来て} まずはじめにしたことは、アパート探しでした。 (過去の体験)

cf. 私が東京に {行って／*来て} まずはじめにすることは、アパート探しです。 (未来の予定)

7) 類似した現象が、次のように、コ系の現場指示詞(金水・田窪1992)でも認められる。

- (i) 例えば、次のような状況を考えてみよう。A社の課長を勤める田中のオフィスを、田中の古い友人で、関連業者のB社に勤める山中が仕事の要件で訪ねる。田中は、ヘッドハンティングされて最近C社から移ってきたのである。田中と山中は仕事の話方々、業界の最近の動向について、熱心に意見を交換しあう。ちょうど昼休みになったので、二人は社外に出、会社の近くのうなぎやで昼食を取る。その、仕事中の会話：

(i) 山中：しかし君も、この会社ではなかなかのびのびとやっているようだね。

田中：ああ、上司も私の経験を評価してくれているし、部下もなかなか有能だ。ここはなかなか居心地がいいよ。

対話の現場はあくまで会社の外の店であるから、「この会社」や「ここ」が指し示すA社は、非現場の要素と考えなければならない。しかし対話の中でずっとA社を含めた業界の事が話題となっていること、現場は社外であるとはいえA社の「圏内である」という意識が話し手・聞き手にあることなどの条件によって、話し手・聞き手の近くにありかつ共有されているという条件が満たされ、コの使用が可能になるのである。この例は、現場の抽象化による拡張、ということができよう。(金水・田窪1992: 147)

このように、(18)の原則から逸脱した例も一部認められるが、(18)は、原則としては基本的に維持されるものとする。

なお、(18)の原則は、次のように、「行く／来る」が従属節内に現れ、かつ、主文主体（主文主語）が聞き手／第三者である場合の例には適用されない。

(22) (話し手が、一足先に宴会会場に到着している幹事の聞き手に電話で)
私が七時過ぎても「来／*行か」ないようでしたら、先に宴会を始め
てください。

(23) 私は会社が退けると、わざと街でぶらぶらして時間を消し、ころ合い
を見計らって彼女の家に行った。彼女の方でも私の来るのを心待ちに
しているようで、晩飯などを用意していたりした。

(松本清張「潜在光景」『影の車』19頁)

(24) 私は、この女から二三間あとに離れて歩くだけでも、満足だったが、
半町も行かないうちに、女は私をふり向いた。そして私の来るのを待
つようなふうで立ちどまった。

(松本清張「天城越え」『松本清張傑作総集Ⅱ』105頁)

これらの例では、「来る」の視点が主文主体に移っている。移動主体の「私」は、視点者である主文主体の聞き手や「彼女」「女」からすれば他者となる。これらの「来る」は、次節で見る「他者が移動主体であるケース」に順ずる。すなわち、視点者である主文主体は、(22)では発話時において、(23)、(24)では移動時（到達時）において、到達点にいたため、「来る」が使われている（通常の「他者が移動主体であるケース」と異なるのは、視点者が話し手ではなく主文主体となっている点である）。

4.2. 他者が移動主体である場合

他者が移動主体となるケースに関して、久野（1978）では、「来る」に対し

て「E(到着点側の人) > E(動きの主体, 出発点側の人)」, 「行く」に対して「E(動きの主体, 出発点側の人) ≥ E(到着点側の人)」という視点制約を与えている (=11b)。視点による整理としては基本的に妥当な整理と言えるが(ただし, 話し手の視点が接近する到達点には, 必ずしも「人」がいるとは限らない⁸⁾), このケースにおける実際の「行く/来る」の選択の全てがこの視点制約から直ちに予測できるというわけではない(3節参照)。本節では, 基本的に大場(1997)に沿って, 他者が移動主体である場合の「行く/来る」の選択を決める要因を, 「話し手の物理的位置」と「話し手の物理的位置以外」とに分けて考察する。

4.2.1. 話し手の物理的位置

「話し手の物理的位置」に関わる「行く/来る」の選択は, 次の原則としてまとめられる。この整理は, 基本的に大場(1997: 162)の整理と同じである。

- (25) 他者が移動主体である場合の「行く/来る」の選択が話し手の物理的位置によって決まる場合:

話し手が, 発話時, 移動時のいずれか(またはその両方)において, 到達点にいる場合は「来る」が選択される。一方, 話し手が, 発話時, 移動時のいずれか(またはその両方)において出発点におり, かつ, 話し手が, 発話時, 移動時のいずれにおいても到達点にいない場合は「行く」が選択される。

ここでは, 発話時/移動時において, 話し手が物理的に出発点または到達点に位置するケースが問題となる(話し手が発話時/移動時において出発点にも

8) たとえば, 「話題性」(4.2.2.2節), 「注意の焦点」(4.2.2.3節), 「ホームベース」(4.2.2.4節)の要因が関与する「来る」の場合, 到達点は話し手が視点を接近させる「人」がいない場所である例もあり得る。

	出発点		到達点		行く／来る の選択
	発話時	移動時	発話時	移動時	
ケース 1	√	*	*	*	行く
ケース 2	*	√	*	*	行く
ケース 3	√	√	*	*	行く
ケース 4	*	*	√	*	来る
ケース 5	*	*	*	√	来る
ケース 6	*	*	√	√	来る
ケース 7	*	√	√	*	来る
ケース 8	√	*	*	√	来る

表 1 話し手の物理的位置と「行く／来る」の選択

到達点にもいない場合は、次節で見る「話し手の物理的位置以外」の要因が「行く／来る」の選択に影響を与える)。発話時において話し手が同時に出発点と到達点に位置することや、移動時において話し手が同時に出発点と到達点に位置することはできないため、この「話し手の物理的位置」で問題となるケースは次の 8 つのケースとなる（話し手が当該の時点において、当該の場所にいる場合は√、いない場合は*で示す）（大場（1997：162-163）も参照）。

この表の見方を、ケース 1 を例に説明する。ケース 1 は、話し手が発話時において出発点にいることを示す。このケースでは、話し手は発話時において到達点におらず、また、話し手は移動時において出発点にも到達点にもいない。このようなケース 1 の移動状況を表す場合、「行く」が選択される。

ケース 1 からケース 8 までの具体例を以下に示す（例文中の「ここ」は、発話場所を表すものとする）。

(26) (ケース 1：話し手は発話時に出発点にいる)

明日、太郎が僕の代わりに、ここから駅まで花子を迎えに {来て／行って} くれる。

- (27) (ケース2：話し手は移動時に出発点にいる)
 昨日、太郎が僕のいた場所から駅まで花子を迎えに {*来て／行って} くれた。
- (28) (ケース3：話し手は発話時にも移動時にも出発点にいる)
 昨日、僕は、ここから駅まで花子を迎えに {*来る／行く} 太郎を見送った。
- (29) (ケース4：話し手は発話時に到達点にいる)
 あ、太郎が {来た／*行った}。
- (30) (ケース5：話し手は移動時に到達点にいる)
 昨日、太郎が駅まで僕を迎えに {来て／*行って} くれた。
- (31) (ケース6：話し手は発話時にも移動時にも到達点にいる)
 昨日、太郎がここまで僕を迎えに {来て／*行って} くれた。
- (32) (ケース7：話し手は移動時に出発点におり、発話時に到達点にいる)
 昨日、太郎が僕のいた場所からここまで花子を迎えに {来て／??行って} くれた。
- (33) (ケース8：話し手は発話時に出発点におり、移動時に到達点にいる)
 昨日、太郎がここから僕を迎えに {来て／?行って} くれた。

(29)–(33)の例が示すように、発話時または到達時（ないしはその両方）において、話し手が到達点にいる（いた）場合には基本的に「来る」が選択される。次の実例も、到達時に話し手が到達点にいることを前提とした発話であるため（ケース5の例）、「来る」が使われている（「行く」は不自然となる）。

- (34) 「じゃ、明日、三時半に、有楽町のレバンテにこいよ」
 安田は、目もとを笑わせながら言った。
 翌日の十四日の三時半ごろ、とみ子がレバンテに行くと、安田は奥の方のテーブルに来て、コーヒーを飲んでいた。

「やあ」

と言って前の席をさした。 (松本清張『点と線』 9-10頁)

- (35) 「ちょっと、お目にかかりたいんですが、そちらに伺ってもいいでしょうか？」

「いいえ、今夜はいけません」

槇村隆子はすぐに断わった。

「十分間でいいんです。何でしたら、ご近所の喫茶店にでも来ていただけませんか？」

戸谷は頼んだ。 (松本清張『わるいやつら (上)』 272 頁)

日本語とは対照的に、英語では、移動時に話し手が到達点にいる (いた) 場合には、come のみならず、go も使われ得る (Fillmore 1972, 1975, 1997)。

- (36) He'll {come/go} to the office tomorrow to pick me up.

(Fillmore 1997 : 88)

- (37) {Come/Go} and meet me at my favourite restaurant in Conduit Street.

(Brown and Levinson 1987 : 121)

日本語は、話し手が移動時に到達点にいる (いた) 場合には、自身のいる (いた) 到達点側の視点から他者の移動を描写しなければならない点で、英語よりも「自己中心的」(egocentric) な捉え方が徹底している。

4.2.2. 話し手の物理的位置以外

話し手が発話時／移動時において、物理的に出発点、到達点のどちらにもいない場合、他者が移動主体となる場合の「行く／来る」の選択には、少なくとも以下の要因が関与する⁹⁾

- (38) 他者が移動主体である場合の「行く／来る」の選択が話し手の物理的位置以外の要因によって決まる場合：
- a. **親近感**：移動主体よりも到達点側の人のほうが話し手にとって心理的に近い人である場合は「来る」、到達点側の人よりも移動主体のほうが話し手にとって心理的に近い人である場合は「行く」が選択されやすい。
 - b. **話題性**：移動主体よりも到達点側(の人や場所)のほうが談話上、際立った対象である(話題性が高い)場合は「来る」、到達点側(の人や場所)よりも移動主体のほうが談話上、際立った対象である(話題性が高い)場合は「行く」が選択されやすい。
 - c. **注意の焦点**：移動主体(の動き)よりも到達点側(の人や場所)のほうに話し手の視覚的注意が向けられている場合は「来る」、到達点側(の人や場所)よりも移動主体(の動き)のほうに話し手の視覚的注意が向けられている場合は「行く」が選択されやすい。
 - d. **ホームベース**：到達点が話し手のホームベースであり、話し手が移動主体を自身のホームベースで受け入れる意識を持っている場合は「来る」、到達点(が話し手のホームベースでなかったり、到達点(が話し手のホームベースであっても話し手が移動主体を自身のホームベースで受け入れる意識が希薄な場合は「行く」が選択されやすい。

以下、これらの要因について、順に見ていくこととする。

9) これらの要因の幾つかについては先行研究でも指摘されているが(森田(1968), 大江(1975), 久野(1978), 坂本(1988), 薛(1991), 大場(1997), 森本(1999), 中澤(2002), Shibatani(2003), 定延(2006), Oshima(2012), 澤田(2013), 松本・夏(2015), 古賀(2018)等), 体系的・包括的な考察が課題として残る。これらの研究については、関連する議論の中で触れる。

4.2.2.1. 親近感

Kuno (1987: 212) は、日・英語の種々の言語現象の考察をもとに、次の「共感度階層」(empathy hierarchy)を想定している(さらに、久野(1978: 146)参照)。

- (39) 「言語行為的共感度階層」(Speech Act Empathy Hierarchy): 話し手は自分よりも他人に共感することはできない。

E (speaker) > E (others) (Kuno 1987: 212)

ここでは、二人称(聞き手)と三人称(第三者)は、「その他」(others)に括られており、両者の間で序列の差は前もって決められていない。この点に関して、Kuno (1987: 212-213)では、「共感度階層において第三者が聞き手よりも高いか否かは、発話時における話し手と第三者や聞き手との間の心理的関係(psychological relationship)に依存する」と説明されている(さらに、久野(1978: 262, 315), Shibatani (2003: 276-277, 285)の議論も参照)。ここで言う「心理的関係」を測る指標の1つが、いわゆる「ウチ(in-group)／ソト(out-group)」の関係であろう。

金水(1989a)は、日本語において、「ウチ／ソト」の概念を組み込んだ次の語用論的な人称階層を仮定している(上位>下位)(さらに、金水(1989b: 7, 1995: 64)を参照)。

- (40) 話し手 > *話し手の身内 > *聞き手 > 聞き手の身内 > その他

(*の部分は逆転する場合もある) (金水 1989a: 109)

金水(1989a: 109, 1989b: 7-8)によれば、「ある人物の身内とは、親族、会社など、その人物が帰属し、その人物のアイデンティティの形成に関わるような集団のメンバーである(ただし、その人物が属する集団がここで言う身内

を構成するか否かは、集団の社会的性格だけでなく、話し手の意識や文脈によって決定されるものと考えられる)」とされる。

金水（1989a）が想定するこの階層は、日本語における「共感度階層」（の一部をなす）と見ることができる。すなわち、一般に、日本語話者は、この階層上、より下位の参与者よりもより上位の参与者のほうに共感しやすいと想定されるのである。

金水（1989a）は、(40)の階層を日本語の授受表現（「やる／くれる／もらう」）の議論の中で提示しているが、この階層は「行く／来る」の選択関係を捉える上でも有効である。

ここで、(40)の階層上、より下位の参与者が移動主体で、より上位の参与者が到達点側の人である場合には「来る」が、より上位の参与者が移動主体で、より下位の参与者が到達点側の人である場合には「行く」が選択されやすい、言い換えれば、話し手にとって、移動主体よりも到達点側の人のほうが心理的に近い人である場合は「来る」、到達点側の人よりも移動主体のほうが心理的に近い人である場合は「行く」が選択されやすいと仮定してみよう（この点については、坂本（1988：57-59）、中澤（2002：297）も参照）。

この仮定を、以下の具体例をもとに検証してみよう（（「行く／来る」の移動において、「話し手」が移動主体（出発点側の人）や到達点側の人となる場合については既に見たので（4.1節、4.2.1節）、ここでは、話し手以外の参与者（「話し手の身内」、「聞き手」、「聞き手の身内」、「その他」）が移動主体、到達点側の人として現れる例を挙げる。また、以下の例では全て、話し手は、発話時／移動時において、物理的に出発点にも到達点にもいないものとする）（√は容認度として「自然」であることを示す）。

(41) 〈話し手の身内 vs 聞き手〉

（話し手が聞き手に電話で）

- a. うちの娘が君に会いに {行く／(?)/?来る} のではと心配だ。
 b. 君がうちの娘に会いに {行く／来る} のではと心配だ。
- (42) 〈話し手の身内 vs 聞き手の身内〉
 (話し手が聞き手に電話で)
 a. うちの娘が君の息子さんに会いに {行く／*来る} のではと心配だ。
 b. 君の息子さんがうちの娘に会いに {√/(?)行く／来る} のではと心配だ。
- (43) 〈話し手の身内 vs その他〉
 (話し手が聞き手に電話で)
 a. うちの娘が男に会いに {行く／*来る} のではと心配だ。
 b. 男がうちの娘に会いに {√/(?)行く／来る} のではと心配だ。
- (44) 〈聞き手 vs 聞き手の身内〉
 (話し手が聞き手に電話で)
 a. 君が寮生活を送る君の娘さんにこっそり会いに {行く／*来る} のではと心配だ。
 b. 寮生活を送る君の娘さんがこっそり君に会いに {√/(?)行く／来る} のではと心配だ。
- (45) 〈聞き手 vs その他〉
 (話し手が聞き手に電話で)
 a. 君が男に会いに {行く／*来る} のではと心配だ。
 b. 男が君に会いに {√/(?)行く／来る} のではと心配だ。
- (46) 〈聞き手の身内 vs その他〉
 (話し手が聞き手に電話で)
 a. 君の娘さんが男に会いに {行く／*来る} のではと心配だ。
 b. 男が君の娘さんに会いに {√/(?)行く／来る} のではと心配だ。

ここでの「行く／来る」の分布は概ね先の仮定に従っているが、総じて、b文の「行く」は、a文の「来る」よりも容認度が高い傾向にある。「行く」の視点制約は「来る」の視点制約に比べ弱い（「行く」は中立的な視点を許容し得る）（久野 1978：264）ためであろう¹⁰⁾

中澤（2002, 2011）では、移動主体が話し手の場合、聞き手に視点（直示的中心点）をシフトさせた聞き手中心の「来る」は使えないが、次の(47)の例のように、移動主体が（話し手の身内を除く）第三者の場合は、聞き手に視点をシフトさせた聞き手中心の「来る」が使われ得ることが指摘されている。この場合の「来る」の使用可能性は、(40)の階層（聞き手＞その他）によって説明される（この点については、中澤（2002：295-297）も参照）¹¹⁾

10) 金水（1989a）の(40)の階層では、「話し手の身内＞聞き手」の序列が逆転する場合があります。得る点が想定されている（金水 1989a）。私見では、そのような序列の逆転が生じやすいケースの1つとして、「聞き手」が「話し手の身内」よりも「身内度」が高い場合が挙げられる。たとえば、次の例を見てみよう。

(i)（「君」は話し手の妻、「伯母」は話し手の伯母を指すものとする）

（話し手が聞き手（妻）に電話で）

a. 相続の件で、君が伯母に会いに {行く/?来る} のではと心配だ。

b. 相続の件で、伯母が君に会いに {↓/(?)行く／来る} のではと心配だ。

「身内度」を決める指標の1つとしては「親等」（親族関係の遠近を表す単位）が考えられる（父母・子＝1親等、祖父母・孫・兄弟姉妹＝2親等、おじ・おば＝3親等。配偶者は親等的にはゼロ）。ただし、話し手がどちらの身内をよりウチとみなすかは、その時々話し手の心理によっても影響を受けると考えられる。この点については、菊地（1993：29）も参照されたい。

11) 「親近感」は、「行く／来る」以外のダイクシス表現の選択にも影響を与え得る要因となる。たとえば、文脈指示用法のコとソの選択には様々な要因が関与し得ることが知られているが、その1つとして、指示対象に対する「親近感」を挙げることができる。金水（1989a：105）は、「ソよりもコが好まれる文脈の一例」として次の興味深い例を挙げている。

(i) 私はいま、西宮という町に住んでいる。{この/?その} 町は大阪と神戸の間にある住宅・工業都市であるが、「甲子園球場」のある町であることを知っている人は案外少ない。（金水 1989a：105）

金水（1989a：105）によれば、この例において「ソを用いるとややよそよそしい感じがするのは、「自分の住んでいる町」という限定の効果によるものと思われる」とする。指示対象に対する「親近感」がコを選択の優先性に影響を与えていることが示唆される。

- (47) 電力会社に電話したら、だれか {来て／*行って} くれますよ。

(中澤 2002: 296)

- (48) 「もしかすると、警察が君に**はく**のことを訊きに**来る**かもしれない。
その時も必ずそう云ってくれ」

(松本清張『わるいやつら (下)』10 頁)

4.2.2.2. 話題性

談話における「話題性」(topicality) も、とりわけ三人称の語りの談話においては、「行く／来る」の選択に影響を与える要因の1つとなる(この点については、古賀(2018)も参照のこと)。たとえば、次の例を見てみよう。

- (49) (状況：教室には太郎と花子の二人しかいないものとする)

放課後、太郎は教室で宿題をしていた。太郎はわからない箇所があったので、教室の後ろで掲示物を貼っていた花子に質問をしに {行った／??来た}。

- (50) (状況：教室には太郎と花子の二人しかいないものとする)

放課後、花子は教室の後ろで掲示物を貼っていた。花子が掲示物を貼り終えて一息ついていると、席で宿題をしていた太郎が花子に質問をしに {??行った／来た}。

ここでの登場人物である「太郎」と「花子」はいずれも三人称であるが、話題性が高いのは、(49)では「太郎」、(50)では「花子」である。ここから、移動主体よりも到達点側の人のほうが話題性が高い場合には「来る」が、到達点側の人よりも移動主体のほうが話題性が高い場合には「行く」が選択されやすいことがわかる。これは、話題性の高い三人称のほうが話題性の低い三人称よりも視点を置きやすいからである(久野(1978: 148-149)の「談話主題の視点ハイアラーキー」も参照)。

これとの関連で想起されるのが、北米先住民最大の語族とされるアルゴンキン語族 (Algonquian) に典型的に見られる「疎化」(obviation) の現象である。疎化とは、「三人称を話題性の度合いに応じて区別する現象」(古賀 2015: 81) であり、談話上、話題性の高い三人称は「近接形」(proximate) で、それ以外の(すなわち、相対的に話題性の低い)三人称は「疎遠形」(obviative) で表示される (Wolfart and Carroll 1981: 25, Dahlstrom 1986a: 108, 1986b: 51-54, Comrie 1989: 43-44, Aissen 1997: 706, Huang 2014: 175)。たとえば、次のクリー語 (Cree) (アルゴンキン語族の一言語) の例を見てみよう (prox: 近接, obv: 疎遠) (Dahlstrom 1986b: 51)。

- (51) awa pe·yak na·pe·sis o·hta·wiya e·okima·wiyit,
 this one boy his father obv be chief obv
 misatimwa ite· e·-aya·yit, e·kote· aya·w ;
 horse obv where be obv there be 3
 ‘A certain boy [prox] whose father [obv] was chief was there where the
 horses [obv] were ;’ (Dahlstrom 1986b: 51)

ここでの談話には、三人称の参加者が三者現れているが、このうち、最も話題性の高い「少年」が無標の近接形で表示され、それ以外である「少年の父親」と「馬」は疎遠接尾辞 *-a* を伴った有標の疎遠形で表示されている(また、動詞 *aya·w* ‘be’ は無標の三人称単数の屈折 (unmarked third person singular inflection) を表示するが、疎遠形で表示された参加者が主語となる動詞に対しては、三人称接尾辞 *-t* に加え、疎遠形接尾辞 *-yi-* が付加されている) (Dahlstrom 1986b: 51)。近接形で表示される三人称は、話題性が高い(すなわち、談話主題となっている) ため、疎遠形で表示される三人称よりも視点を近づけやすいとされる (Dahlstrom (1986a: 108, 1986b: 52), Oshima (2007: 736) 参照)。

Wolfart and Carroll (1981: 27) によれば、クリー語では、一度に近接形で表示される参加者は一人であるとされる(さらに、Fillmore (1970: 269, 1997:

99) 参照)¹²⁾ Fillmore (1970: 269-270, 1997: 98-99) は、この疎化の振る舞いと機能的に類似した振る舞いが直示移動動詞に見られると指摘している。

- (52) a. Fred came to where Harry was, and then Harry went to where Bill was.
 b. *Fred came to where Harry was, and then Harry came to where Bill was.
 (Fillmore 1970: 269)

Fillmore (1997: 98) によれば、三人称の語りの文では、一度に複数の三人称の参与者に視点（直示的中心点）を置くことはできないとされる。(52a)では、語り手の視点が一貫して Harry のみに置かれているため自然であるが、(52b)では、語り手の視点が Harry と Bill の二人に同時に置かれているため不自然となるとされる。同様の事実は日本語の三人称の語りの文でも観察される¹³⁾

- (53) a. 太郎が次郎のところに来た後、次郎は花子のところに行った。
 b. *太郎が次郎のところに来た後、次郎は花子のところに来た。

4.2.2.3. 注意の焦点

松本・夏 (2015) は、ビデオ映像を使った実験をもとに、日本語では、図3(a)のように、話し手の注目領域への（他者の）移動を描写する場合（ないしは、「着点注視」の場合）には「行く」よりも「来る」の使用率が高くなり、逆に、図3(b)のように、話し手の注目領域以外への（他者の）移動を描写する場合（な

12) Dahlstrom (1986a: 137-144) では、平原クリー語 (Plains Cree) において、近接形が同時に複数の三人称参与者に表示される “multiple proximates” の現象が指摘されており、実際の談話内での現象はもう少し複雑なようである。

13) 次の文は、中立的な視点で述べられているため自然である (Fillmore 1970: 269)。

- (i) Fred went to where Harry was, and then Harry went to where Bill was.
 (Fillmore 1970: 269)
 (ii) 太郎が次郎のところに行った後、次郎は花子のところに行った。

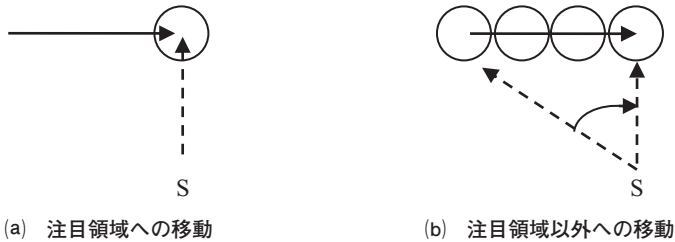


図3 (松本・夏 2015: 192)

いしは、「移動物注視」の場合)には「来る」よりも「行く」の使用率が高くなる点を報告している(S:話し手,一重矢印:移動主体の移動,点線矢印:話し手の視線)(松本(2018)も参照)。この松本・夏(2015)の報告は,到達点が話し手の視覚的注意の焦点(注目領域)となっているかどうか「行く/来る」の選択に影響を与え得ることを示している(さらに,Matsumoto, Akita and Takahashi (2017)も参照)。

松本・夏(2015)のこの興味深い指摘を踏まえ,次の例を見てみよう(「ホシ」は犯人を指す)。

- (54) a. (刑事が遠く離れた場所から一軒の店を注視し,そこに犯人が現れるのを待っている。隣にいるもう一人の刑事に向かって)
 おい,ホシが店に {来た/?行った} ぞ。
- b. (刑事が遠く離れた場所から犯人の動きを目で追っている。隣にいるもう一人の刑事に向かって)
 おい,ホシが店に {?来た/行った} ぞ。

到達点に話し手の視覚的注意が向けられている a 文の場合は「来る」が,移動主体(の動き)に話し手の視覚的注意が向けられている b 文の場合は「行く」が選択されやすい。ここでの「行く/来る」の選択は,松本・夏(2015)の報告とも一致する。(54a)では,発話地点ではなく,話し手の注目地点が,「来

る」の直示的中心点（心理的な視点位置）となっている点にも注目したい。

注目領域（注視領域）への移動を表す問題の「来る」の現象（松本・夏 2015）との関連で想起されるのが、近接指示詞（コ系）の次のような現象である。すなわち、指示対象が話し手から遠く離れたところに位置していたとしても、話し手の視覚的注意がそれ（そこ）に一定時間向けられると、物理的な距離感が捨象され、遠くの指示対象がコ系の近接指示詞で指示可能となる（cf. 木村 2012: 74-77）¹⁴⁾ 次の例では、遠く離れた話し手の注目領域である「来る」の到達点が、近接指示詞の「ここ」で指示されている。

- (5) （刑事が遠く離れた場所から一軒の店を注視し、そこに犯人が現れるのを待っている。隣にいるもう一人の刑事に向かって）
ホシは必ずここに来るはずだ。（ここ＝遠くにある一軒の店）

一方で、問題の「来る」の注目領域は「あそこ」で指示することもできる。

- (6) （刑事が遠く離れた場所から一軒の店を注視し、そこに犯人が現れるのを待っている。隣にいるもう一人の刑事に向かって）
ホシは必ずあそこに来るはずだ。（あそこ＝遠くにある一軒の店）

14) 木村（2012: 74-77）は、中国語では、独言や内言においては、遠くの対象が近称指示詞の「这（zhè）」で指示され得る点を指摘している。

(i) 聞き手めあての対話とは異なり、独言や内言は、相手に対象の相対的な位置を教えるという伝達行為を必要としない。つまり、対象の位置や領域の遠近を相対的に言い分けることは、少なくとも伝達という機能論的側面においては不要である。話し手は自分が知覚し、注目した対象について、一人叙述を展開するのみである。こうした場合、中国語では、その注目の対象と話し手との間の実空間上の相対的な隔たりは捨象され、対象は——恰も被写体のズーム・インにも似て——総じて「近い」ものと認識される、言い換えれば、ワレの領域内のものと認識される傾向が強くなると考えられる。（木村 2012: 76）

木村（2012）が指摘する中国語の「这」の現象は、問題のコ系と類似の現象であると考えられる（ただし、日本語の場合には、話し手と聞き手が共に指示対象に視覚的注意を向けていれば、対話においても問題のコ系の現象は現れ得ると考えられる）。

問題の「来る」の注目領域は、「あそこ」で指示することも可能であることから、その場所は「距離感の捨象（喪失）」によって「話者領域化」しているわけではないが、話し手の視覚的注意が関与する現象である点では、問題の「来る」の現象と問題のコ系指示詞の現象との間には関連性が認められる¹⁵⁾

4.2.2.4. ホームベース

話し手は物理的に到達点に身を置いていなくても（すなわち、話し手は発話時、移動時に到達点にいなくても）、到達点が自身の「ホームベース」(Fillmore 1972: 10, 1975: 60, 1997: 90)であれば、そこへの他者の移動を「来る」で表せる場合がある（森田（1968）、大江（1975）、坂本（1988）、薛（1991）、森本（1999）、定延（2006）、Oshima（2012）、澤田（2013）、古賀（2018）等参照）。ここで言うホームベースとは、言語行為参与者（話し手または聞き手）の側（ウチ）に属する場所を指す。次のように、言語行為参与者の居住地（自宅）がホームベースの典型場所となる（Fillmore（1972: 9, 1997: 90）参照）。

(57) a. Fred came to my apartment twice last week while I was gone.

b. I came over to your house last night, but you weren't home.

(Fillmore 1972: 10)

Fillmore（1972, 1975, 1997）、及び、本稿の「ホームベース」の概念は、神尾（1990）が下に定義する「なわ張り」の概念と重なる部分が多い。

15) 次のように、発話場所が「ここ」で示されている場合には、遠くの注目場所は「ここ」で指示することができなくなる（次の(i)において、波線部の「ここ」は発話場所を、下線部の「あそこ／ここ」は遠くの注目場所を指すものとする）。この場合、「距離感の捨象（喪失）」が難しくなるのであろう。

(i) (刑事が遠く離れた場所から一軒の店を注視し、そこに犯人が現れるのを待っている。隣にいるもう一人の刑事に向かって)

ホシはここではなく、必ず あそこ／*ここ に来るはずだ。

- (58) まず、人物Xと場所Lとの間に何らかの深い関係が成立している時、XとLとの心理的距離は〈近〉であり、LはXのなわ張りに属するものとする。「何らかの深い関係」とは、Lが物理的な場所の場合、XがLの所有者あるいは居住者であるといった関係である。またLが催し物、出来事などの生ずる場所である場合には、Xがそれらの出来事の主催者や中心人物である場合である。さらに、Xの近親者や親しい人物Yがこれらの所有者、居住者、主催者または中心人物である場合にも、LはXのなわ張りに属する人物Yのなわ張りに属するが故に、LはXのなわ張りに属するものとする。 (神尾 1990: 171)

ここで特に注目したいのは、「人物Xが催し物、出来事などの生ずる場所Lの主催者や中心人物である」(神尾 1990: 171) ケースである(ここでは、人物Xは話し手であると想定しておく)。たとえば、次の例を見てみよう(なお、第41回日本アカデミー賞授賞式の会場、すなわち、ここでの「来る」の発話場所は、到達点の映画館ではなく、東京・グランドプリンスホテル新高輪である)。

- (59) 第41回日本アカデミー賞授賞式が2日、都内にて行われ、是枝裕和監督の『三度目の殺人』が作品賞をはじめ最多6部門で最優秀賞を受賞した。(中略)

最優秀主演女優賞に輝いたのは『彼女がその名を知らない鳥たち』の蒼井優。しばらく声を詰まらせた後に「ビックリしています。この映画を撮っているとき、本当に映画界に入って良かったと思ったんです。私、本当に映画が好きで…。これから新学期や新生活が始まる時期を迎えますが、もしつらいことがあったらぜひ映画館に来てください」と目を潤ませながら、あふれる喜びと映画愛を語っていた。

(<http://www.tokyoheadline.com/404691/>) (最終検索日: 2018年9月23日)

ここでの「ぜひ映画館に来てください」という発話における「映画館」とは「催し物、出来事などの生ずる場所」（神尾1990:171）であり、話し手（蒼井優）は、役者（女優）として映画界に携わる人物である点で、映画館と「深い関係」にある人物と言える。それゆえ、ここでは、（話し手は発話時／移動時に移動主体が訪れる到達点（映画館）にいないと想定される場合でも）「来る」の使用が自然となる（なお、「ぜひ映画館に行ってください」では、「ぜひ映画館に来てください」に認められる話し手と映画館との間の「深い関係」が感じられにくくなる）。

このような話し手が催し物、出来事などの生ずる場所に（中心的に）携わる人物となっている「来る」の例も、「ホームベース」の「来る」の例に含めて考えることが可能であると言える¹⁶⁾

では、続いて、次の例を見てみよう（話し手は、発話時にも移動時にも、到達点（自宅）にはいない点に留意されたい）。

- (60) (話し手が、主張先から、一人暮らしをする父親に電話をかける)

俺、今、出張中で、来週までうちには帰れないんだけど、今日、子供達が帰省するみたいなんだ。せっかくだから、親父も今日うちに {??} 行かない／来ない} か？ 子供達も久しぶりに顔見たいって言ってるようだし。

- (61) (主張中の話し手が、話し手の自宅近くまで家族旅行で来ているという友人に電話で)

あいにく僕のほうは今、出張中でうちにはいないんだけど、せっかくだから、奥さんや子供さんも連れてうちに遊びに {??}行きな／来な}

16) ただし、神尾（1990）が⁵⁸⁾で挙げる3つ目に相当するケース、すなわち、「話し手の近親者や親しい人物が深い関係を持つ場所が「来る」の到達点となるケース」については、本稿では、「ホームベース（なわ張り）」ではなく、「親近感」（4.2.2.1節）のケースとして扱われる。

よ。うちの者も喜ぶよ。

話し手の自宅への他者の移動を表すこれらの例では、「行く」よりも「来る」が自然である。では、次の例はどうであろうか。

- (62) (話し手が、主張先から、一人暮らしをする父親に電話をかける。花子は話し手の妻を指す)
 昨日から花子に何度も電話をかけてるんだけど、全然出ないんだ。
 で、俺のほうは今出張中で、すぐには戻れそうにないんだ。親父、悪いけど、少し花子の様子を見に、うちに{行って/??来て}くれるか？
- (63) (自宅にパスポートを忘れてきた話し手が、空港から友人に電話で)
 今、空港なんだけど、家にパスポートを忘れて来ちゃったみたいなんだ。悪いんだけど、うちにパスポートを取りに{行って/??来て}くれないかな？ 家の者にその旨伝えておくからさ。

ここでの到達点も話し手の自宅であるが、先に見た例と異なり、「来る」は不自然である。これはなぜであろうか。

(60)–(63)の例では、話し手が発話時／到達時において到達点の自宅（ホームベース）にいないという点では同じであるが、(60), (61)では、話し手が（心理的に）移動主体を自身のホームベースで受け入れる（迎え入れる）意識があるのに対して、(62), (63)では、話し手が（心理的に）移動主体を自身のホームベースで受け入れる（迎え入れる）意識が希薄であるという違いが認められる。このことは、到達点が話し手のホームベースであったとしても、話し手が移動主体を自身のホームベースで受け入れる（迎え入れる）意識が希薄である場合は「来る」が使いにくくなることを示している¹⁷⁾

ここで、さらに別の観点から、ホームベースと「来る」の関係について考えてみよう。

- (64) (状況：話し手は今出張で海外（日本国外）にいる。話し手は発話時にも移動時（明日の時点）にも北海道にはいないが、話し手は普段北海道に住んでおり、北海道は話し手にとって関わりの深い場所（ホームページ）である）
- a. 明日、農林水産大臣が農地視察のため東京から北海道に（やって）来る。
- b. 明日、オバマ前大統領が農地視察のためアメリカから北海道に（やって）来る。

この例では、a文、b文共に「来る」が自然である。では、次の例はどうであろうか。

- (65) (状況：話し手は今出張で海外（日本国外）にいる。話し手は発話時にも移動時（明日の時点）にも北海道にはいない。また、北海道は話し手にとって何ら関わりのある場所ではない）
- a. *明日、農林水産大臣が農地視察のため東京から北海道に（やって）来る。
- b. 明日、オバマ前大統領が農地視察のためアメリカから北海道に（やって）来る。

北海道は話し手のホームページでないことから、(65a)の「来る」の不自然さは説明できる。では、同じ北海道への移動に対して、(65b)で「来る」が自然となるのはなぜであろうか。(65b)では、移動主体が海外からやって来

17) 「来る」が自然となる(60), (61)の発話の言語行為（発話行為）(speech act)は「誘い」であり、この「誘い」の言語行為は、移動主体を自身のホームページで受け入れる（迎え入れる）話し手の意識と調和しやすいという面もある（長友俊一郎氏（関西外国語大学）との個人談話による）。

るため、「北海道に来る」が「日本に来る」に相当する内容として解釈可能となっていると考えられる（澤田 2013:364）。次の例では、移動主体の移動が日本国内の移動を表すため、(65b)と異なり、「来る」の使用は不自然となる。

(66) (65)と同様の状況で)

*明日、来日中のオバマ前大統領が農地視察のため東京から北海道に
(やって)来る。

4.3. 話し手と他者が共に移動主体となる場合

話し手と他者が共に移動主体となるケースは、話し手が移動主体となるケース(4.1節)や他者が移動主体となるケース(4.2節)に比べ論じられることが少なく(久野(1978)の「行く／来る」の視点制約(=11)でもこのケースは想定されていない)、日本語の「行く／来る」の研究においては、やや盲点となっていたケースと言える(このケースの「行く／来る」については、Gathercole(1977, 1978), 坂本(1988), 陣内(1991), 神尾(2002), 韓(2008, 2016), 澤田(2014)等参照)。このケースの例として、はじめに次の例を見てみよう。

- (67) a. 今からコンビニに行こうと思うんだけど、君も一緒に 行く／行かない／来る／来ない ?
b. 今からコンビニに行こうと思うんだけど、太郎のやつも一緒に 行く／行かない／来る／来ない かな？

(67)の「来る」は、発話場所が目的地(コンビニ)ではないため、「話し手が移動主体である場合」の「来る」(4.1節)とは異なる。また、「他者が移動主体である場合」の「来る」(4.2節)とも異なる。話し手は、発話時においても移動時においても目的地(コンビニ)にはまだおらず、そこは話し手のホー

ムベースでもないからである（さらに、目的地は、話し手の注視する場所でも、話し手の近い人がある場所でもなく、目的地は「どこか」のような不定表現で表せることから（68参照）、談話主題となっている必要もない）。

（67）の「来る」は他者（聞き手、第三者）が話し手に同行・随行する移動を表し、ここでの「来る」が表す到達点は、目的地（コンビニ）ではなく、先導者として他者を引き連れる話し手であると言える。すなわち、ここでの「来る」は、随伴者である他者が先行者である話し手に付き従う「ついて来る」に似た意味を表す（この点で、67）において、目的地（コンビニ）が到達点となる「行く」とは異なる）。

また、67）では、「来る」の「視点」も、目的地ではなく、先導者として他者を引き連れる話し手に置かれている。目的地に視点が置かれていないことは、次のように、発話時において目的地が定まっていなくても、「来る」が使えることからわかる。

- （68） a. 今からどこかに遊びに行こうと思うんだけど、君も一緒に 行く／行かない／来る／来ない？
- b. 今からどこかに遊びに行こうと思うんだけど、太郎のやつも一緒に 行く／行かない／来る／来ない かな？

話し手が聞き手に同行を求める場合、単に連れ立って移動することを表す「行く」と異なり、「来る」は、話し手が聞き手を随えて移動することを表すため、次の例に見られるように、上位者に対して使うと不遜な発話に感じられ、対人配慮的に不適切な発話となる（#は、対人配慮的に不適切な発話であることを示す）¹⁸⁾

18) このケースにおける「来る」が目上に対して用いると失礼になる（目上に対しては用いにくい）という点については、坂本（1988：60）や陣内（1991：84）にも指摘がある。

(69) a. (社内で先輩が後輩に向かって)

これから食堂に行くけど、君も一緒に 行かないか／来ないか？

b. (社内で後輩が先輩に向かって)

これから食堂に行きますが、先輩も一緒に 行きませんか／#来ませんか？

日本語では、上位者に対する使用が語用論的な違反(失礼)となる現象が種々認められる。これには少なくとも次のようなケースが考えられる(澤田 2017)。

(70) (i) 相手の私的領域に踏み込む発話により、失礼さが生じるケース

(ii) 相手より上の立場からの発話により、失礼さが生じるケース

(i)のケースは、鈴木(1997)で論じられているような相手の欲求・願望等に触れる表現の運用などに見られる(例：#先生、コーヒー召し上がりたいですか)。一方、(ii)のケースは、与益表現「てさしあげる」(例：先生、お鞆、{持ってさしあげます／お持ちします})や、ねぎらい語(例：御苦勞様)などに見られる。(69b)に見る「来る」の運用は(ii)の失礼さのケースに含められると言える(澤田 2017: 162)。

続いて、次の例を見てみよう。

(71) 今からコンビニに行こうと思うんだけど、君も一緒に 行こう／*来ようよ。

cf. また一緒にここに来ようよ。(到達点での発話)

ここでの「来る」が不適格となるのは、勧誘の助動詞「(よ)う」によって、主語に話し手が含まれるからである。ここでは、話し手が主語に含まれる場合、「話し手が移動主体である場合」の(18)の原則が適用されると想定する。(18)の

原則によれば、「来る」の使用は通例、発話場所が到達点の場合に限られる。この原則の適用を想定するならば、上の cf の例のように、発話場所が到達点であれば「来る」が適格となる事実も説明される。この点は、次のような英語の let's 文と平行的である (let's の (縮約された) us は「聞き手包含的用法」(inclusive use) に解釈される点に留意されたい)。

- (72) Let's {go/*come} there right away. (Fillmore 1972: 9)
 cf. Let's come right back. (Fillmore 1972: 9)

では、続いて次の例を見てみよう。

- (73) (話し手は聞き手と一緒にコンビニに出掛けたいと思っている)
 今から一緒にコンビニに {行く／行かない／*来る／*来ない} ?
 (74) (話し手は太郎と一緒にコンビニに出掛けたいと思っている)
 太郎のやつも一緒にコンビニに {行く／行かない／??来る／??来ない}
 かな？

興味深いことに、先に見た(67)の例と異なり、これらの例では、「来る」が不自然となる。ここでは、目的地(コンビニ)が「行く／来る」の補部(着点項)として現れている点が注目される。このような場合、目的地への移動がフォーカスされ、日本語では、随伴移動の「来る」が使いにくくなるのだと考えられる。

ただし、次のように、目的地が話し手のホームベースである場合には、「行く」よりも「来る」が自然となる(この点については、韓(2008, 2016)、澤田(2014)も参照)¹⁹⁾

- (75) a. (放課後の学校で, 話し手が友達を家に誘う)
 今から一緒にうち {??行く/来る}?
- b. (授業後の教室で教員が学生に向かって)
 山田君, ちょっと (僕と) 一緒に僕の研究室に {??行って/来て}もらえるか?

話し手と他者が共に移動主体となるケースの「行く/来る」の選択原理は、次のようにまとめられる。

- (76) 話し手と他者が共に移動主体となる場合
- a. 目的地が直示移動動詞の補部(着点項)として現れていない場合:
 話し手が他者(聞き手や第三者)を随えて移動する場合は「来る」,
 (どちらかがどちらかを随えるというのではなく)両者が単に連れ立って移動する場合は「行く」が選択される。
- b. 目的地が直示移動動詞の補部(着点項)として現れている場合:
 目的地が, 話し手のホームベースである場合は「来る」, 話し手のホームベースでない場合は「行く」が選択される。

話し手と他者が共に移動主体となる随伴移動のケースでは, COME/GO の使用が言語間で異なり得る点が指摘されている(Fillmore(1975, 1997), Gathercole(1977, 1978), 坂本(1988), 森本(1999), 韓(2008, 2016), 澤田(2014)等)。以下, 本稿の立場から, 英語, 韓国語との対照を行ってみたい。ここでは, 特

19) 目的地が話し手のホームベースである場合であっても, 以下の例のように, 文末が勧誘の助動詞「(よ)う」の場合には, 「来る」は不適格となる(久野(1978: 257)も参照)。

(i) (放課後の学校で, 話し手が友達を家に誘う)

*君に見せたい物があるから, 今から一緒に僕のうちに {*来よう/行こう}。

(71)の例でも論じたように, 勧誘の助動詞「(よ)う」によって主語に話し手が含まれることになるため, 「話し手が移動主体である場合」の(18)の原則が適用されて「来る」は不適格となると考えられる。

に、「話し手と他者が共に移動主体となる場合」の COME の言語間の差異を捉えるために、上の日本語での議論を敷衍し、このケースにおける COME として次の3タイプを仮定する。

(77) 話し手と他者が共に移動主体となる場合の COME

- a. A タイプの COME：目的地が COME の補部（着点項）として現れていない。
- b. B タイプの COME：目的地が COME の補部（着点項）として現れているが、その目的地は言語行為参加者のホームベースである。
- c. C タイプの COME：目的地が COME の補部（着点項）として現れているが、その目的地は言語行為参加者のホームベース以外の場所である。

以下、(77)の COME の分類を念頭に、英語と韓国語について見ていこう。

英語では、次のように、目的地が直示移動動詞の補部（着点項）として現れていない場合、come の使用が可能であり（go の使用も可能である）、日本語と同様、A タイプの COME が認められる。

(78) We're going to the cinema tonight. Would you like to come with us?

(Swan 2005: 110)

(79) “Now, Watson,” said Holmes, as a tall dog-cart dashed up through the gloom, throwing out two golden tunnels of yellow light from its side lanterns. “You’ll come with me, won’t you?”

“If I can be of use.”

(Arthur Conan Doyle, “The Man with the Twisted Lip.” 232-233 頁)

（「ところでワトスン君」と、そこへ一頭びきの背のたかい馬車が、両がわの側灯から二条の黄いろい光の棒を放射しながら姿を現わしたの

を見て、ホームズはいった。「一緒に行ってくれるだろうね？」

「何か役にたつようならば」(コナン・ドイル「唇の振れた男」(延原謙(訳)『シャーロック・ホームズの冒険』新潮社, 200頁))

- (80) (放浪の旅に出る話し手が聞き手に対して)

Would you like to {come/go} (along) ? (Fillmore 1997 : 97)

次は、主語の同行者が聞き手である場合の come の例である。

- (81) Can Johnny come (with you) ? (Fillmore 1997 : 97)

- (82) They stared up at the house.

Lombard said :

“It came from there. We’d better go up and see.”

“No, no, I’m not going.”

“Please yourself. I am.”

Vera said desperately :

“All right. I’ll come with you.”

They walked up the slope to the house.

(Agatha Christie. *And Then There Were None*. 254-255 頁)

(二人は、屋敷のほうをじっと見あげた。

「あっちから聞こえたな。行ってみよう」と、フィリップは言った。

「いやよ。わたしは行きません」

「好きなようにしたまえ。ぼくは行く」

ヴェラはしかたなく、あきらめたように言った。

「わかったわ。一緒に行くわよ」

二人は屋敷めざして、坂をのぼった。) (アガサ・クリスティー(著)・青木久恵(訳)『そして誰もいなくなった』早川書房, 330頁)

英語において注目されるのは、目的地が直示移動動詞の補部(着点項)として現れている場合、次の(83)、(84)のように、目的地が言語行為参加者のホームベースである場合のみならず、(85)–(90)のように、目的地が言語行為参加者のホームベース以外である場合でも、*come* が使用可能であるという点である(これらの場合、基本的に *go* も使用可能である)。すなわち、英語では、さらに B タイプに加え、C タイプの COME も認められる。

- (83) “I’ll go with you to take her home, and then you’ll come to my house with me,” I suggested, very pleased with my plan.

(Dorit Orgad, *The Boy from Seville*. 21 頁)

- (84) “Why don’t you come to my office with me so I can get his file. Then I can give you more accurate information.”

(Jane Ingram, *Christa : There’s Always a Tomorrow*. 553 頁)

- (85) Come to the theatre with us tonight, and bring Mary. (Swan 1980 : 118)

- (86) (自宅で父親が子供に向かって)

“Come to the zoo with your dad!” (パパと動物園に行こか)

(『対訳よりぬきコボちゃん①』 27 頁)

- (87) Do you want to {come/go} with me to the movies ?

(Brown and Levinson 1987 : 122)

- (88) Are you {coming/going} to the party with me ? (Gathercole 1977 : 77)

- (89) Do you know if John’s {coming/going} to the party with me ?

(Gathercole 1977 : 77)

- (90) Will you {come/go} to the dance with me tonight ? (Gathercole 1978 : 86)

話し手と他者が共に移動主体となるケースでは、英語の *come* のほうが日本語の「来る」よりも使用範囲が広いことがわかる。

英語においては、話し手と他者が共に移動主体となるケースでは基本的に come と go の両方が使用可能であり、この場合、「come と go の区別は中和される」(Gathercole 1978: 84) とされる。ただし、一般に、話し手に同行する者(主語)が聞き手である場合、go よりも come を使ったほうが聞き手に対する「親密さ」が感じられ、come と go ではポライトネス上の差異が認められるとされる(Gathercole 1977: 92, 1978: 84, Brown and Levinson 1987: 122, 久野・高見 2017: 201-202)²⁰⁾

次に、韓国語について見てみよう。韓(2008, 2016)に先駆的な指摘があるように、韓国語では、話し手と他者が共に移動主体となる場合、基本的に、「오다 (ota)」(来る)は使えず、「가다 (kata)」(行く)が使われる(さらに、徐(2013: 115-116), 澤田(2014: 119-122)も参照)²¹⁾以下の例では、全て「오다 (ota)」(来る)の使用は不自然となる(ローマ字表記は、Yale 式による)²²⁾ ⑨1は目的地が直示移動動詞の補部(着点項)として現れていない場合の例、⑨2, ⑨3は目的地が直示移動動詞の補部として現れている場合の例であり、そのうち、⑨2は目的地が話し手のホームベースでない例、⑨3は目的地が話し手のホームベースである例である。

20) 久野・高見(2017)は、次の(i)の例について、(ii)のような興味深い説明を行っている。

- (i) Do you want to {come/go} to the concert with me? (久野・高見 2017: 201)
 (ii) たとえば、(i)では、come を使うと、聞き手に対してより温かで、聞き手がコンサートと一緒に行くことを話し手が歓迎している意味合いがあります。つまり、「一緒に」(being together) という点を強調し、話し手が、聞き手と一緒にコンサートに行くことを望み、一緒に行きたいという気持ちをより強く表わしています。このように、come の使用は、話し手と聞き手が当該の移動をお互いにとって「親密(intimate)な」ものと捉えていることになります。一方で、(i)で go を用いると、聞き手が(話し手と一緒に)コンサートに行く行為そのものを強調し、感情を抑えた単なる質問(e.g. Do you want to go to the concert with me or stay home and study?)という感じで、come と比べると多少冷たく、よそよそしい(distant)響きを伴います。(久野・高見 2017: 201-202)

- (91) (自宅で、話し手が聞き手に、今から自分と一緒にコンビニに行くかどうか尋ねる場面)

지금 편의점 갈건데, 너도 같이 {갈래/*올래} ?

cikum phyenuycem ka-lke-ntey, ne-to kathi {ka-llay/*o-llay}?

今 コンビニ 行くつもりだけど 君も一緒に {行く-意志/来る-意志}

「今からコンビニに行くけど、君も一緒に {行く/来る} ?」

21) 韓 (2016) は、「話し手と聞き手が一緒に移動する」ケースにおける日・韓語の違いを次の(i)のようにまとめた上で、「行く」と「来る」はより心理的要因と関わり、「가다 kata (行く)」と「오다 ota (来る)」はより物理的要因と関わり」と論じている。

- (i) 話し手と聞き手が一緒に移動する場合、「行く」と「来る」は話し手と到着点との関係を重視する。到着点が話し手の領域として認知されれば、移動主体の話し手と聞き手が出発点から遠ざかっていく場面でも「来る」を用い、そうでない場面では「行く」が用いられる。一方、「가다 kata (行く)」と「오다 ota (来る)」は、到着点が話し手の領域として見なされる場所であっても、発話地点から遠ざかっていく場面では「가다 kata (行く)」が優先される。(韓 2016: 61)

ここで言う「話し手の領域」とは、神尾 (1990) の「なわ張り」の定義 ((58) 参照) に従うとされることから、韓 (2016) の言う「話し手の領域」の概念は、Fillmore (1972, 1997) や本稿で言う「ホームベース」の概念とも基本的に一致する概念であることがわかる (また、「心理的要因」とは「話し手の領域 (なわ張り)」を意識することを言うと言われる (韓 2016: 53) 参照)。この点を踏まえるならば、韓 (2016) の上の(i)の日本語の「行く/来る」の選択に関する一般化は、本稿の (76b) のケースの一般化の先駆をなす一般化として注目される。さらに、韓 (2016) の研究は、韓国語では、話し手と聞き手が一緒に移動する場合の到着点 (目的地) が「話し手の領域」、すなわち、「話し手のホームベース」である場合でも、「가다 kata (行く)」が選択 (優先) される事実を的確に捉えている点で、日・韓語の対照研究の面でも重要な先駆的研究である。

一方で、韓 (2016) の(i)の一般化においては、本稿の (76a) の一般化に相当する「来る」のケース、すなわち、目的地が「話し手の領域 (話し手のホームベース)」ではないが「来る」が使われる(67-69)のような「来る」のケースは想定されていない点で、さらなる発展の余地がある (また、韓 (2016) では、「話し手と聞き手が一緒に移動するケース」に考察が限定されているようであるが、本稿のように、「話し手と他者 (聞き手または第三者) が一緒に移動するケース」へと考察範囲を広げる余地も残されていると言える)。

- 22) (91)-(95)の韓国語のデータに関しては、黄智彦、朴賢率、張洪準、金京愛の各氏からご助言を頂いた。また、イェール式のローマ字表記に関しては、浅尾仁彦氏 (国立研究開発法人情報通信研究機構) が開発された「ハングル→イェール式ローマ字変換」ツール (<http://asaokitan.net/tools/hangul2yale/>) を利用させて頂いた。

- (92) (自宅で, 話し手が聞き手に, 今から自分と一緒にコンビニに行くかどうか尋ねる場面)

지금 같이 편의점 {갈래/*올래} ?

cikum kathi phyenuycem {ka-llyay/*o-llyay} ?

今一緒にコンビニ {行く-意志/来る-意志}

「今から一緒にコンビニに {行く/来る} ?」

- (93) (教室で, 先生が学生に, 今から自分と一緒に自分の研究室まで来るよう依頼する場面)

박군, 잠깐 연구실까지 같이 {가/*와} 주겠는가?

pak-kwun, camkkan yenkwusil-kkaci kathi {ka/*wa} cwu-keyss-nunka ?

パク-君 ちょっと 研究室-まで一緒に {行つて/来て} くれる-意志-か

「パク君, ちょっと研究室まで一緒に {行つて/来て} くれるか?」

さらに, 次の例を比較してみよう。

- (94) (放課後の学校で, 話し手は聞き手に, これから自分(話し手)と一緒に自分(話し手)の家に来よう誘っている場面)

지금 같이 우리집 {갈래/*올래} ?

cikum kathi wuli-cip {ka-llyay/*o-llyay} ?

今一緒に私の-うち {行く-意志/来る-意志}

「今から一緒にうち {行く/来る} ?」

- (95) (自宅にいる話し手が電話で, 別の場所にいる聞き手に, これから自分(話し手)の家に来よう誘っている場面)

지금 우리집 {*갈래/올래} ?

cikum wuli-cip {*ka-llyay/o-llyay} ?

今私の-うち {行く-意志/来る-意志}

「今からうち {行く/来る} ?」

「話し手と他者（聞き手）が共に移動主体であるケース」の⑨4の例では、「오다 (ota)」（来る）は不適格となり、一方、「他者（聞き手）が移動主体であるケース」の⑨5では、「오다 (ota)」（来る）が適格となる。目的地は同じく話し手の自宅（ホームベース）であるが、ケースの違いに応じて、「오다 (ota)」（来る）の適格性が異なる点が興味深い。

以上の考察から、基本的に、韓国語の「오다 (ota)」（来る）は、Aタイプ、Bタイプ、Cタイプにわたって、話し手と他者が共に移動主体となる随伴移動のCOMEの用法を持たないことがわかる²³⁾

23) ただし、今回調査したインフォーマントの中には、目的地が話し手のホームベースである⑨3や⑨4の例において、「같이 (kathi)」（一緒に）を削除した場合においては、（一緒に移動するという状況設定はそのままでも）「오다 (ota)」（来る）が自然となると回答した話者が複数いた。

これらの話者によれば、以下の「오다 (ota)」（来る）の例は自然であるという。

(i) (教室で、先生が学生に、今から自分と一緒に自分の研究室に来よう依頼する場面)

박군, 잠깐 연구실까지 와 주겠는가?
pak-kwun, camkkan yenkwusil-kkaci wa cwu-keyss-nunka?
パク-君 ちょっと 研究室-まで 来て くれる-意志-か
「パク君、ちょっと研究室まで来てくれるか?」

(ii) (放課後の学校で、話し手は聞き手に、これから自分（話し手）と一緒に自分（話し手）の家に来よう誘っている場面)

지금 우리집 올래?
cikum wuli-cip o-llay?
今 私の-うち 来る-意志
「今からうち来る?」

「같이 (kathi)」（一緒に）を削除した(i), (ii)の例の場合、「他者が移動主体となるケース」、より具体的には、「他者（ここでは聞き手）が話し手のホームベースに移動するケース」(cf. 4.2.2.4節)の解釈を潜在的に含み得る。この点で、「같이 (kathi)」（一緒に）が明示化され、話し手と他者が共に移動主体となる随伴移動が明白な⑨3, ⑨4の例とは異なる。

一方で、今回調査したインフォーマントの中には、上記の(i), (ii)の例は、「같이 (kathi)」（一緒に）がなくても、話し手と聞き手がこれから一緒に移動する状況（同行することが前提となっている状況）を表すのであるから、⑨3, ⑨4と同様、「오다 (ota)」（来る）は不自然（「가다 (kata)」（行く）のほうが自然）であるとみなす話者も存在した。

本稿では、「같이 (kathi)」（一緒に）が明示化され、話し手と他者が共に移動主体となる随伴移動のケースであることが明白な例をもとに議論をおこなっているが、(i)や(ii)の「오다 (ota)」（来る）については、その使用可能性も含め、今後、さらに詳細な調査を行う必要がある。

(77)の分類に基づき、「話し手と他者が共に移動主体となる場合」における日本語、英語、韓国語の COME の使用範囲の差を示したのが次の表である（当該のタイプの COME がある場合は√、ない場合は*で示している）。

	目的地が COME の補部（着点項）として現れていない場合（=A タイプの COME）	目的地が COME の補部（着点項）として現れている場合	
		目的地は言語行為参加者のホームベース（=B タイプの COME）	目的地は言語行為参加者のホームベース以外の場所（=C タイプの COME）
英語	√	√	√
日本語	√	√	*
韓国語	*	*	*

表2 話し手と他者が共に移動主体となる場合の COME の言語間の使用範囲の差

言語類型論的なインプリケーションに関しては、今後さらに多くの言語との対照を行うことで見えてくると考えられる（また、それに伴い、より細かな区分の設定が必要になる可能性もある）が、ここでの表から、A タイプと B タイプの COME は、C タイプの COME よりも相対的に現れやすいという予測、ないしは、C タイプの COME を持つ言語であれば、A タイプ、B タイプの COME も持つという含意階層的な予測が 1 つの仮説として得られる。とりわけ、B タイプと C タイプに比較を限定した場合、この予測は妥当性の高いものであるように思われる。B タイプの COME は、目的地が言語行為参加者のホームベースとの関わりを持つ点において、C タイプの COME よりも、言語行為参加者との関係性が相対的に強いと考えられる。言語行為参加者との関係性をより強く有する移動場面のほうが COME の使用がより実現しやすいと見ることは自然であるように思われる。

5. お わ り に

現代日本語（共通語）の直示移動動詞「行く／来る」の語用論的な選択原理は、次のようにまとめられる。

(96) 現代日本語（共通語）の「行く／来る」の語用論的な選択原理

I：話し手が移動主体である場合

通例、発話場所が到達点であれば「来る」、到達点以外であれば「行く」が選択される。

II：他者が移動主体である場合

i. 話し手の物理的位置によって決まる場合：

話し手が、発話時、移動時のいずれか（またはその両方）において、到達点にいる場合は「来る」が選択される。一方、話し手が、発話時、移動時のいずれか（またはその両方）において出発点におり、かつ、話し手が、発話時、移動時のいずれにおいても到達点にいない場合は「行く」が選択される。

ii. 話し手の物理的位置以外の要因によって決まる場合：

- a. 親近感：移動主体よりも到達点側の人のほうが話し手にとって心理的に近い人である場合は「来る」、到達点側の人よりも移動主体のほうが話し手にとって心理的に近い人である場合は「行く」が選択されやすい。
- b. 話題性：移動主体よりも到達点側（の人や場所）のほうが談話上、際立った対象である（話題性が高い）場合は「来る」、到達点側（の人や場所）よりも移動主体のほうが談話上、際立った対象である（話題性が高い）場合は「行く」が選択されやすい。

- c. 注意の焦点：移動主体（の動き）よりも到達点側（の人や場所）のほうに話し手の視覚的注意が向けられている場合は「来る」、到達点側（の人や場所）よりも移動主体（の動き）のほうに話し手の視覚的注意が向けられている場合は「行く」が選択されやすい。
- d. ホームベース：到達点話し手のホームベースであり、話し手が移動主体を自身のホームベースで受け入れる意識を持っている場合は「来る」、到達点話し手のホームベースでなかったり、到達点話し手のホームベースであっても話し手が移動主体を自身のホームベースで受け入れる意識が希薄な場合は「行く」が選択されやすい。

Ⅲ：話し手と他者が共に移動主体となる場合

- i. 目的地が直示移動動詞の補部（着点項）として現れていない場合：

話し手が他者（聞き手や第三者）を随えて移動する場合は「来る」、（どちらかがどちらかを随えるというのではなく）両者が単に連れ立って移動する場合は「行く」が選択される。
- ii. 目的地が直示移動動詞の補部（着点項）として現れている場合：

目的地が、話し手のホームベースである場合は「来る」、話し手のホームベースでない場合は「行く」が選択される。

「来る」、「行く」には、それぞれ、話し手の視点が到達点に置かれているか、到達点以外に置かれているかといった視点の違いが反映されているが、話し手はそのような視点の選択を、種々の語用論的要因（語用論的状况）を考慮に入れることによって決定している。このような語用論的要因の適用の仕方や適用

の範囲は言語間で均一なわけではなく、このことが言語ごと（さらには、同一言語内における方言や時代ごと）のCOME/GOの選択原理（使用条件）の相違となって現れているとみることができる。

[付記] 本稿は、澤田（2016）の第2節の内容に大幅な加筆・修正を施し、その内容を発展させたものである。なお、本研究はJSPS科研費JP16K16845（研究課題名：「ダイクシスに関する言語学的研究－対照研究，歴史研究，方言研究の観点から－」）の助成を受けたものである。

参 考 文 献

- Aissen, Judith. 1997. On the syntax of obviation. *Language* 73(4) : pp. 705-750.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard. 1989. Some general properties of reference-tracking systems. In: Doug Arnold, Martin Atkinson, Jacques Durand, Claire Grover, and Louisa Sadler (eds.) *Essays on Grammatical Theory and Universal Grammar*. pp. 37-51. Oxford: Clarendon Press.
- Dahlstrom, Amy. 1986a. Plains Cree morphosyntax. Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Dahlstrom, Amy. 1986b. Weak crossover and obviation. *Proceedings of the Twelfth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. pp. 51-60.
- DeLancey, Scott. 1981. An interpretation of split ergativity and related patterns. *Language* 57(3) : pp. 626-657.
- DeLancey, Scott. 1985. The analysis-synthesis-lexis cycle in Tibeto-Burman: A case study in motivated change. In: John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*. pp. 367-389. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Devos, Maud and Jenneke van der Wal. 2014. How far have we come and where do we go from here? Discussion and directions for further research. In: Maud Devos and Jenneke van der Wal. (eds.) *'COME' and 'GO' off the Beaten Grammaticalization Path*. pp. 321-335. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Fillmore, Charles. J. 1970. Subject, speakers, and roles. *Synthese* 21 : pp. 251-274.
- Fillmore, Charles. J. 1972. How to know whether you're coming or going. *Studies in Descriptive and Applied Linguistics* 5 : pp. 3-17. Tokyo: International Christian University.
- Fillmore, Charles. J. 1975. *Santa Cruz Lectures on Deixis 1971*. Indiana: Indiana University

Linguistic Club.

- Fillmore, Charles. J. 1982. Ideal readers and real readers. In Deborah Tannen (ed.) *Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics 1981, Analyzing Discourse: Text and Talk*, pp. 248-270. Washington, D. C.: Georgetown University Press.
- Fillmore, Charles. J. 1992. "Corpus linguistics" or "computer-aided armchair linguistics". In: Jan Svartvik (ed.) *Directions in Corpus Linguistics: Proceedings of Nobel Symposium 82 Stockholm, 4-8 August 1991*, pp. 35-60. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Fillmore, Charles. J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Gathercole, Virginia. C. 1977. A study of the comings and goings of the speakers of four languages: Spanish, Japanese, English, and Turkish. *Kansas Working Papers in Linguistics* 2: pp. 61-94.
- Gathercole, Virginia. C. 1978. Towards a universal for deictic verbs of motion. *Kansas Working Papers in Linguistics* 3: pp. 72-88.
- Goddard, Cliff. 1998. *Semantic Analysis: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- 韓京娥. 2008. 「行く」「来る」と「가다 kata」「오다 ota」の選択要因『日本言語学会第136回大会予稿集』 pp. 306-311. 日本言語学会.
- 韓京娥. 2016. 「日本語の「行く」「来る」と韓国語の「가다 kata (行く)」「오다 ota (来ル)」-話し手と聞き手が一緒に移動する場面を中心に-」『日本學報』108: pp. 49-64. 韓國日本學會.
- Huang, Yan. 2014. *Pragmatics*. Second edition. Oxford: Oxford University Press.
- 陣内正敬. 1991. 「来る」の方言用法と待遇行動『国語学』167: pp. 82-90. 国語学会.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論』東京:大修館書店.
- 神尾昭雄. 2002. 『続・情報のなわ張り理論』東京:大修館書店.
- 片岡邦好. 2008. 「空間談話におけるメンタル・マップの協同構築-日本人ロック・クライマーによる直示移動動詞「行く/来る」の用法について-」篠原和子・片岡邦好(編)『ことば・空間・身体』 pp. 69-100. 東京:ひつじ書房.
- 菊地康人. 1993. 「日本語教育のための基礎研究-言語学者の仕事と日本語教育家の仕事-」『東京大学留学生センター紀要』3: pp. 13-48. 東京大学留学生センター.
- 木村英樹. 2012. 『中国語文法の意味とかたち-「虚」の意味の形態化と構造化に関する研究-』東京:白帝社.
- 金水敏. 1989a. 「代名詞と人称」北原保雄(編)『講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体(上)』 pp. 98-116. 東京:明治書院.
- 金水敏. 1989b. 「敬語優位から人称性優位へ-国語史の一潮流-」『女子大文学 国文篇』40: pp. 1-17. 大阪女子大学国文学科.
- 金水敏. 1995. 「敬語と人称表現-「視点」との関連から-」『国文学解釈と教材の研究』12

- 月号(第40巻14号): pp. 62-66. 東京: 学燈社.
- 金水敏・田窪行則. 1992. 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」金水敏・田窪行則(編)『指示詞』pp. 123-149. 東京: ひつじ書房.
- 古賀裕章. 2015. 「行為の方向性(順行・逆行)」斎藤純男・田口善久・西村義樹(編)『明解言語学辞典』p. 81. 東京: 三省堂.
- 古賀悠太郎. 2018. 『現代日本語の視点の研究-体系化と精緻化-』東京: ひつじ書房.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』東京: 大修館書店.
- Kuno, Susumu. 1987. *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 久野暉・高見健一. 2017. 『謎解きの英文法 動詞』東京: くろしお出版.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar. volume II: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Levinson, Stephen C. 2004. Deixis. In: Laurence R. Horn and Gregory Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. pp. 97-121. Oxford: Blackwell Publishing Ltd.
- 松本曜(編). 2017. 『シリーズ言語対照〈外から見る日本語〉第7巻 移動表現の類型論』東京: くろしお出版.
- 松本曜. 2018. 「直示動詞とその性質: 通言語的実験研究から分かること」京都言語学コロキウム第15回年次大会(KLCAM)発表資料(2018年9月29日, 於: 京都大学)
- 松本曜・夏海燕. 2015. 「直示動詞における「話者領域」と視覚性: 日中英語におけるビデオ実験による考察」『日本言語学会第151回大会予稿集』pp. 188-193. 日本言語学会.
- Matsumoto, Yo, Kimi Akita and Kiyoko Takahashi. 2017. The functional nature of deictic verbs and the coding patterns of Deixis: An experimental study in English, Japanese, and Thai. In: Iraide Ibarretxe-Antuñano. (ed.) *Motion and Space across Languages: Theory and Applications*. pp. 95-122. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 三上章. 1970. 『文法小論集』東京: くろしお出版.
- 森本順子. 1999. 「「来る」の領域-対照研究にむけての試論-」吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会(編)『日本語の地平線-吉田彌壽夫先生古稀記念論集-』pp. 389-400. 東京: くろしお出版.
- 森田良行. 1968. 「「行く・来る」の用法」『国語学』75: 75-87. 国語学会.
- 中澤恒子. 2002. 「「来る」と「行く」の到着するところ」生越直樹(編)『シリーズ言語科学4 対照言語学』pp. 281-304. 東京: 東京大学出版会.
- 中澤恒子. 2011. 「「行く」時, 「来る」時-直示表現の視点-」東京大学言語情報科学専攻(編)『言語科学の世界へ-ことばの不思議を体験する45題-』pp. 33-44. 東京: 東京大学出版会.
- 大場美穂子. 1997. 「移動を表す動詞「行く・来る」の使用法について」『東京大学言語学論集』16: pp. 153-172. 東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室.

- 大江三郎. 1975. 『日英語の比較研究－主観性をめぐって』東京：南雲堂.
- Oshima, David. Y. 2007. Syntactic direction and obviation as empathy-based phenomena: A typological approach. *Linguistics* 45(4): pp. 727-763.
- Oshima, David Y. 2012. GO and COME revisited: What serves as a reference point? *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* vol. 32. pp. 287-298.
- 定延利之. 2006. 「動態表現における体験と知識」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎(編)『日本語文法の新地平1 形態・叙述内容編』pp. 51-67. 東京：くろしお出版.
- 坂原茂. 1995. 「複合動詞「Vて来る」」『言語・情報・テキスト』2: pp. 109-143. 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻.
- 坂本比奈子. 1988. 「日本語の動詞「行く／来る」とタイ語の動詞 pay/maa の対照研究」『麗澤大学紀要』47: pp. 41-74. 麗澤大学.
- 澤田治美. 2009. 「直示的視点と小説に現れた再帰代名詞「自分」の解釈をめぐって」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明(編)『「内」と「外」の言語学』pp. 101-145. 東京：開拓社.
- 澤田淳. 2011. 「日本語のダイクシス表現と視点, 主観性」澤田治美(編)『ひつじ意味論講座第5巻 主観性と主体性』pp. 165-192. 東京：ひつじ書房.
- 澤田淳. 2012. 「日本語の直示的移動動詞に関する歴史的研究－中古和文資料を中心に－」『KLS』32: pp. 97-108. 関西言語学会.
- 澤田淳. 2013. 「COME/GOの直示情報と選択システム－直示的中心の下位区分と階層化の視点から－」見玉一宏・小山哲春(編)『言語の創発と身体性－山梨正明教授退官記念論文集－』pp. 359-385. 東京：ひつじ書房.
- 澤田淳. 2014. 「視点の文法とダイクシス－文法論と語用論の接点－」『青山語文』44: pp. 105-127. 青山学院大学日本文学会.
- 澤田淳. 2015. 「ダイクシスからみた日本語の歴史－直示述語, 敬語, 指示詞を中心に－」加藤重広(編)『日本語語用論フォーラム1』pp. 57-100. 東京：ひつじ書房.
- 澤田淳. 2016. 「日本語の直示移動動詞「行く／来る」の歴史－歴史語用論的・類型論的アプローチ－」山梨正明他(編)『認知言語学論考 No. 13』pp. 185-259. 東京：ひつじ書房.
- 澤田淳. 2017. 「[書評論文] 森勇太著『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』」『日本語文法』17(2): pp. 155-163. 日本語文法学会.
- 藤鳴. 1991. 「日中語における「行き来表現」の意味－「物理的空間」と「心理的空間」をめぐって－」『論叢』22(1): pp. 27-34. 中京短期大学.
- Shibatani, Masayoshi. 2003. Directional verbs in Japanese. In: Erin Shay and Uwe Seibert (eds.) *Motion, Direction and Location in Languages: In Honor of Zygmunt Frajzyngier*. pp. 259-286. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 鈴木睦. 1997. 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則(編)『視点と言語行動』pp. 45-76. 東京：くろしお出版.

- 徐珉廷. 2013. 『〈事態把握〉における日韓話者の認知スタンス－認知言語学の立場から見た補助動詞的な用法の「ていく／くる」と「e kata/ota」の主観性－』東京：ココ出版.
- Swan, Michael. 1980/2005. *Practical English Usage*. First/Third edition. Oxford: Oxford University Press.
- Uehara, Satoshi. 2006. Toward a typology of linguistic subjectivity: A cognitive and cross-linguistic approach to grammaticalized deixis. In: Angeliki Athanasiadou, Costas Canakis, and Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. pp.75-117. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Wilkins, David P. and Deborah Hill. 1995. When “go” means “come”: Questioning the basicness of basic motion verbs. *Cognitive Linguistics* 6(2/3): pp. 209-259.
- Wolfart, H. Christoph and Janet F. Carroll. 1981. *Meet Cree: A Guide to the Cree Language*. Lincoln: University of Nebraska Press.

使用テキスト

- Agatha Christie. *And Then There Were None*. Harper Collins Publishers.
- Arthur Conan Doyle. *The Complete Sherlock Holmes*. Vintage Books.
- Dorit Orgad. *The Boy from Seville*. Kar-Ben Publishing.
- Jane Ingram. *Christa: There's Always a Tomorrow*. Xlibris Corporation.
- 植田まさし(著)・ジュールス・ヤング, ドミニック・ヤング(訳)『対訳よりぬきコボちゃん
①』講談社インターナショナル株式会社.
- 松本清張『わるいやつら(上)(下)』新潮社.
- 松本清張『点と線』新潮社.
- 松本清張『影の車』中央公論社.
- 松本清張『松本清張傑作総集II』新潮社.